

嬉泉の新聞

・嬉泉の新聞／第20号／1991年（平成3年）11月発行（年3回発行）

・発行所＝社会福祉法人嬉泉・東京都世田谷区船橋 1-30-9（〒156）

TEL 03-3426-2323

・発行人＝石井哲夫

・編集人＝友田篤

「福祉の町」づくりと「ベータル」

井本義孝

千葉県袖ヶ浦市（人口約5万4千人）に福祉施設等連絡協議会が結成されたのは4年前である。目的の一つは市の福祉都市化にあり手始めに福祉都市宣言を行うことである。

事務局はもちろん市社協におき、老人、心身障害、保育等の種別を横断している。

「等」の中味は、市域に散在する職親さん達、関係団体、それに未だ実現していないが、教育、医療関係者、就労先の企業である。

施設はとにかく閉鎖的になり易いと思われ、云われてきて既にひさしい。

ノーマライゼーションの理念も、社会参加も、一般の認識が、改まらないかぎり仲々実現は困難である。

正直、隣接する施設が相互に孤立しては、よきノウハウの持ち腐れであろう。

施設同士、同種、異種を問わず、交流により彼我の長短を学び処遇、労務管理等の向上に資することは、従事するものの社会的責務でもあると思う。

この短い4年間であるが、本会の活動により地域行政の担当とも相識り、共に存在している他施設理解が深まると同時に、市民の行政への信頼感、安堵感も増したと云えば手前味噌か。

施設運営者にとりなすべきことは山程ある。直接的運営処遇と同時に地域における施設の役割を再認識し、地域の福祉化をすすめていきたい。

福祉の町づくりを目ざす時、臉に浮かぶはド

イツの懐しいベータルである。

正式の名称は別にあるが、やや北西部に位置するこの福祉の町は、てんかんに悩む者を中心に欧州一のメッカとなっている。

日本では、昭和30年代の後半から40年代にかけコロニー是非論があり、大規模であること、人里はなれたところに建設構想があったがために、隔離するものというレッテルが貼られ、社会的評価を得るには至らなかった。

しかし、全ての施設が同一経過をたどるとは云えぬにしても、ほぼ明治維新と同時代にスタートしたベータルが、今は町全体が即、福祉の町と云った様子を現出していることは私たちに多くの示唆を与えてくれる。

ベータルにつき、詳述する紙数はないが、弱き人々のために配慮された地域こそ行政の究極のありかたと思うものである。

今や、未曾有の少産少死、高齢化時代、それぞれのライフステージに於て、弱者としての生活を余儀なくされる確率は高い。

福祉サービスを他人ごとと考えず、自分のためと思う時、一日も早く、自らの生活地域が、心暖まる福祉ネットワークで結ばれ、冷めたい行政、福祉サービスにならぬよう市民ぐるみの「福祉の町」づくりを今後も目指して行きたいものである。

（千葉県袖ヶ浦福祉センター

更生園 園長）

職員の職場に関わるエゴ・インボリング(自我関与)は、これからの職場の発展を考える上で大変重要な事柄と言わなければならない。職員にはこの仕事を始めるに当たっての動機づけや、仕事に対する予備知識というか専門教育の違いがあつて、一概に考えるわけにはいかないが、少なくとも出発点においては、かなり意欲的に取り組んでいる人たちがかりであつたと言えるのである。それが一年経ち二年経ちしていく中に次第に違いが目立つようになってくるのである。その理由は何であらうか。

第一が出世の見込みである。社会福祉の世界で出世とは何かと叱られそうであるが、やはり自分の周囲を見ていて先輩から信頼されている人や、重要な仕事を言いつかっている人が見えてくると、嫌な気持ちをするものであらう。出世と言うのは、その職場でのエリートであつて、とかくよい職場では、嫌みなくお互いの評価が出来てくるものである。そして多少の違いがあつたとしてもそれぞれの職員が自分の立場を受け入れていけばその職場の雰囲気は安定してくるのである。しかし社会福祉の職場というものは、かなり個人の人間

なり、仕事に対する姿勢や仕事についてのスキルなどと言う個人的な評価となつて、その評価の低い人は、相当な圧力を感じてしまうのである。施設などの閉鎖的な社会で短期間の職員の移動が多いという事は、このような事情も関係してきていると思うのであるがどうであらうか。だからといってこれがまことに難しい事であるが、職員が定着していればよいというものでもないのである。

ある時点でマンネリ化して職員中心の施設は、老齢化した職員が

施設経営の創造性(その十一) 石井哲夫

気力のない運営をしている事があつて、それでよいとは言えない。やはり若い職員で力のある職員がいきいきと仕事をしている事が望まれる事なのである。やはり職員に対する評価とその力を発揮するような責任ある地位につけることが望ましい事であらう。

私が今考えている事は、施設規模の適度な拡大と「のれん分け」という二つの事である。今の社会福祉施設は保育所で象徴されるように一法人一事業所であつて、こ

れだと本当に運営のしようがない。従つて、いつまで経つても職員任せか、施設長のワンマンコントロールとなつてしまふわけである。保育所にしてもほかに障害者施設とか老人施設の一つか二つを併せて経営していると、だいが違つてくると思う。施設で注意しなければならぬ事は、人事の停滞である。職員達は移動される事を嫌う。当面している自分の仕事に愛着を持つ事はよい事であるが、それへのこだわりとそとの満足感を大切にすることである。これはよい

事であるがこれを防がなければ人事は停滞してしまう。もっと大きなこの仕事についての価値観を育てて行かなければ、社会福祉の仕事の発展は無い。施設内の処遇と共に地域援助を求めている人たちに對する配慮は施設を挙げて行わなければならない時代となつていても施設の体質はなかなか変わらないのである。

そこで一法人複数事業所ともなれば人事の交流も可能になってくるのである。また「のれん分け」

であるが、同じ法人の中で施設長を何年か勤めてくるとサラリーマン重役のように器用ながらもこれ又覇気の無い管理者で、部下におもねったり、細かな事にこだわる官僚的な癖を身につけ出す事がある。

これでは、獅子心中の虫になつてしまいかねないので、これは、何としても防がなければならない。そのためには、社会福祉の長として転出を考える事が必要になってくるのである。今求められている新しい施設の長としての需要がかなりあつて、そこに転出させたがこれは飽くまで追い出すと言うのではなく、広い人事交流を行つていふと言う認識である。転出した施設長は新しい社会福祉法人の中でその期待を追つて仕事に励んで行くので相当な力を出して行く。

このような考えを数法人が合意して交流して行けば社会福祉法人の更なる発展が期待できるのではなからうか。それにしても私達の考えている社会福祉事業はまことに狭い枠の中に沈黙しきつていくものかと思うこのごろであり、その同志を募りたいと思つていのである。

私たちの

うやうや

須藤福祉センター各事業所からの報告

のびろ・ひかりの外作業

喜多克彦

外作業といわれる仕事は、草刈り、植栽の手入れ、営繕、にわとり飼育、ゴミ処理、汚水処理など外環境整備と農業生産です。

除草剤を使わない草刈りは、春、夏、秋と年に三回やらねば草刈りがされているように見えません。自走式と肩吊り式の二種類の草刈り機を使いますが、自走式は、平坦地に限られ、肩吊り式は、振動で手がしびれる危険があります。草取りには、外作業スタッフ以外に多くの職員、ご父兄の協力をいただいております。植木の手入れは、秋分の日を過ぎてから始まります。お正月までに宿舎のつげの垣根を刈りそろえます。

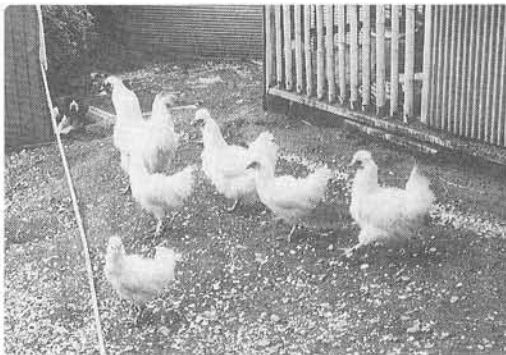
こわれた、棚をつけて欲しい、鏡をつつてくれ、冷房が止まった、蛍光灯がつかない、蜂の巣をとってくれ、プールに穴があいたなど色々です。塗装、溶接に関しては、職人並の技術力があります。農業生産では、鶏卵、野菜、花、栗、椎茸を出荷し三百坪のストープ付きハウスを持っています。一番の特色は、無農薬です。肥料も有機肥料のみにしています。

卵のセールスポイントは、自然卵です。餌に抗生物質を入れず、鶏舎消毒をしません。買い餌は、とうもろこしだけです。糠をコイン精米機から、おが屑を製材所から、おからを豆腐屋から、貝殻を貝屋さんから、棄てる予定の野菜を近所の農家から、残飯を厨房から、鶏舎材料のもうそう竹など色々

なものを利用者といっしょに定期的に貰いにいっています。

ハウスも無農薬ですので生産できる種類と時期が限られます。寒さにむかういまからが活躍の時期です。

ハウスの外に六反歩ほどの畑があります。名前を石井所長がつけました。「仲尾畑」「ハウス畑」「新畑」「しいの木畑」「北の畑」です。無農薬の最大の敵は、雑草です。さつまいも、里芋の除草に多大なご父兄の協力をいただきようやく収穫にこぎつけました。ご父兄の協力なしでは、無農薬栽培は、不可能と認識させられました。



栗畑は、一反歩です。作業指導で「カンパニー」組が栗拾いに行きます。早生栗で出荷が八月末から始まり二十日過ぎに終わります。今年の冬にサイクリングコースに十月出荷栗を植林します。栗も無農薬です。市販の栗は、クロロメチルガスで虫が殺されています。

農業生産には、作業指導も加わっています。「ひかりの牧場」といレギュラーが利用者七人です。特徴は、一輪車をいつも使うことで肥料製造部門を担っています。牛糞、鶏糞、草を運びます。牛糞は、元職員の小野洋子さん宅からダンブカーで貰っています。

なぜ無農薬なのか。市場経済の農業は、農薬と高エネルギーの化成肥料を多用します。農薬は、薄めて使えばどんなに多量でも微量だから安全といわれています。私は、この考え方を信用しません。ひかりの学園の利用者を市場経済型農業に組み込むことも反対です。自然の恵みと地域の好意で成り立つ農業で利用者と共に暮らす生活をめざします。

(袖ヶ浦ひかりの学園)

職員の思い

高島平で

新たな取り組み

内藤 理 絵

高島平五丁目福祉園の、一年目の秋です。

先日、近所の農園へお芋掘に出かけました。車イスの利用者も皆、地べたに腰を降ろし、顔が生き生きとして楽しそうです。カメラの前でポーズをとるMちゃん、土の中を泳ぐようにしてつるを引っ張るO君。その意欲が実ってたくさんのお土産を持って帰りました。四月に、何もない部屋で物を備えることから仕事が始まりました。そして研修、身体障害を持つ利用者を迎えるにあたり、車イスや通園バスのリフトの扱い方を学び、現場で実習を行いました。現在も中島先生を迎えて、毎週「動作法」の勉強をさせて頂いています。学ぶこと、考えることは果てしありません。

嬉泉に籍を置かせて頂いて、私も八年目を迎えました。入った頃は、子ども達の反応が波のように

返ってくる、その手応えがとてもうれしかった。今もそれは変わりませんが、人間をまっすぐ見つめて生きることは、又自分を見つめなくてはなりません。自閉症のお子さん達には多くのことを教えられるました。どんな人にも心が通じる、向き合えば信じられるものなのです。

のびろ学園では多くの方々に出会い、今また金沢先生をはじめお馴染みの職員に囲まれて仕事をしています。どんな時にもこのチームワークが有難く、ひとりではみんなの中で支えられ生きていることを痛感しています。



ここはこぢんまりした場所です、利用者も少人数でスタートしました。しかし、その障害は重く、彼らを抱えた家族の方々の気持ちはまた、どんなにか大変なものがあるかと思っています。

利用者も職員も毎日身近に顔を合わせていますから、できるだけいい雰囲気づくりをしていきたいのです。渡辺園長から、はじめに「アットホームな感じでいきましよう」とお話がありました。非力な私ですが、職員や家族の方々とともに暖かい雰囲気といいチームワークづくりをしていきたいと思っています。

私の「主人」となった人は、全く別な分野の職業に携わっています。福祉園の職員も皆若く、各々自分の夢を持って一歩一歩と仕事を進めているようです。そんな姿を見るにつけ、自分はまだまだ、とため息も出ます。それでもこの仕事を続けていきたいと思う今日このごろです。

*内藤さんはつい先日「結婚されたばかりの新婚さんで、旧姓仁木さんです。」

(高島平五丁目福祉園)

めばえ学園 あたたか組

田中 慶子

四月から、めばえ学園の新しいグループ「あたたか組」で、はじめてのグループリーダーをさせて頂いた。早いものでもう半年になります。あたたか組は、年令は三〜四才で集団生活が初めてのお子さんがほとんどです。最初は、初めての生活の中で、ちょっとしたことにも動揺し、不安になるという状態がしばらく続きました。そういう気持ちに触れるたびに、リーダーとして初めての自分と同じだなと感じていて、お子さんに「わかる、わかる、でもがんばろうね」というような気持ちも伝えながら、また自分自身にも、そう言い聞かせてきたように思います。最近、少しずつどうにか安定してきてはいますが、まだまだちょっとしたことでもぐずれ易い状態です。もうすぐ運動会があります。いつもと違う状況の中で、どうなることかと心配ですが、お子さんたちが、どうかそこにとどまって参加できるよう、同じような気持ちで迎えるだろう私自身も一緒にのりこえていきたいと思っています。

(めばえ学園)

地域に支えられて

●投稿

私とのびろ学園

袖ヶ浦高校 萱野 由希江

私は、袖ヶ浦高校ボランティア同好会に所属しています。普段の活動として、施設訪問、広報紙の発行、通学路清掃、募金活動、古切手回収、文化祭参加等を行っています。

特に施設訪問は、菜の花苑という特別養護老人ホームを訪問しています。学期に一度か二度程度の訪問でも、名前を覚えていてくれるおばあちゃんもいます。あるおばあちゃんは、いつも苑の中をぐるぐる徘徊しています。老人性痴呆症の方でも運動神経などは残っているようで、足先を引きずりながらも止まることをしません。そんな苑のお年寄りたちも、人と別れることのさびしさはわかるようで、訪問した私たちと別れる時に、涙ぐむおばあさんもいました。

また、今年度の袖高祭での発表は、今までの活動報告と合わせて、昨年と同じように、のびろ学園と福祉センターの作品を展示、即売しました。また、車いすの体験乗車もしてもらいました。

「のびろ学園って卵売ってる所だよ。」とか、「のびろパン知ってるよ。」などと声をかけてくれる人もいて見に来てくれた人の関心が高かったので、うれしかったです。

のびろ学園には、私が一年生の時、一度施設見学に行きました。



パンを作っている様子や、学園のみなさんが作り上げた作品等を見せてもらいました。パン作りの先生が、私の学校の卒業生だと聞いて驚きました。また、その人が友達のお姉さんだと知って、これからはもうずっとがんばってほしいと思いました。学園の方のお話で、学園が家庭と同じような生活の場だとわかりました。また、映画「レインマン」を例に上げて、学園生の持っているすばらしい能力を熱心に話してくれました。そんな学園のある人が、自閉症と呼ばれるのが、いやだと言われていたのが、大変印象的でした。

千歳船橋商店街

めばえ学園 柏木 理江

子どもの生活研究所では、自分で弁当を作ってこないくせに「カップラーメンなんていやだ」という贅沢者(?)のお昼ご飯は、最近近所にできたお弁当屋さん頼ることになっています。中でも駅から子研に来る途中にあり、ショー・ウィンドーにおいしそうなおかずがずらりと並んだお弁当屋さんには、大人ばかりでなく子研に通ってくる子ども達も、少なからずお世話になっているようです。

たとえばこぐま学園にやってくるTちゃん。お店の前を通るたびに、なにかしらおかずを買ってもらうのが楽しみの一つです。Tちゃんばかりではありません。概して食べ物には興味津々のこの子たち。中には、いつまでもショー・ケースにへばりついて中をのぞきこむ子、「買ってくれなきゃ、お家に帰らない」とばかりに、お店の前からなかなか動こうとしない子などなど。

時には迷惑に思うでしょうに、お店の人たちはいつでも親切に、子ども達を微笑みながら見守ってくれます。さらには、「ああ、あの子ね。よく来ますよ。本当にかわいらしいわねえ。」などと言ってくださる心の広さには、本当に感謝しています。

このお弁当屋さんを始めとして、千歳船橋商店街は子どもたちにとっては宝の山です。一つ一つのお店に突進して行く子どもは少なくはありません。そんな時、親切に見守り、時には優しく諫めて下さるお店の方々。そうした噂をあちこちから耳にするたび、つくづく「この仕事は地域の人の理解があって成り立っていくんだなあ」と感じのります。

嬉泉の出来事

新しい園舎が完成

高島平五丁目福祉園

この四月から東京都板橋区からの受託による高島平五丁目福祉園は、その地に建築中の二階建(延五五六平米)の仮園舎が竣工し、七月二十二日に都立板橋養護学校から引越し、同二十五日、関係者近隣の人々、保護者等多数のご隣席のもと、落成式が厳粛かつ盛大に行われました。区長挨拶、区議会議長祝辞の励ましにこたえて、石井常務理事は固い決意をのべました。

建物はプレハブとは思えないほど明るく、きれいです。一階は指導室、作業室、事務室、厨房、便所、二階には指導室、医務室、指導員室、便所等があり、車イス用エレベーターもあります。また指導訓練用の教材、器具等も逐次整備されつつあり、利用者達は全員毎日元気よく、楽しく日課に励んでいます。

でいます。

なお、今年十一月から隣接して平屋建一七四平米の園舎の増設工事が始まり、来年三月に完成させ、定員四〇名受入れに備えることになっております。(渡辺)

第八回自閉症治療

教育セミナー

自閉症治療教育セミナーは、今年で第八回を迎え、霞ヶ関の全社協ホールにおいて八月八日から三日間にわたり開催されました。

これまで自閉症児・者の発達の援助に関わるテーマを取り上げ、福祉処遇、とりわけ治療教育的処遇の統合化にむけて、臨床心理学の様々な領域と精神医学の領域との学際的交流が展開されてまいりましたが、今年は現在までの治療教育上の成果を踏まえ更なる発展にむけて「強度行動障害の療育の理論と実践」「年長自閉症者の諸問題」などをテーマとして、石井所



長をはじめ馬場禮子先生、山崎晃資先生、小出進先生、倉光修先生、宇佐川浩先生を講師にお招きし、講義、シンポジウム、ケースカンファレンスを行いました。講義される先生方の根底に流れるものが深く結びついており感銘をうける内容であったと思います。

また、受容的交流療法の実践報告は、詳細な事例検討に加えて石井所長のスーパーヴィジョンが展開され、その内容は強いインパクトで講師の先生はじめ受講生の方々にひろまりました。

(春原)

雨の中の夏祭り

毎年研究所の子ども達が楽しみにしている夏祭りが、今年も八月二〇日に行われました。あいにく朝から雨模様で、園庭で行われる予定を体育館に移しての、ちょっとこじんまりしたお祭りになりました。

狭いながらも例年に負けないお祭りにしようと、職員全員で朝から準備にあたりました。机で作った即席のやぐらに太鼓が置かれ、楽しそうなゲームやおもしろい食べ物がいっぱいと並び、天井一杯に吊した提灯に明りがとると、いつも見慣れた体育館も、りっぱなお祭り会場になりました。

結局夕方になりお祭りが始まってからもずっと雨は止まず、楽しみにしていた花火はおあずけになってしまいました。それでも土砂降りの中をたくさんのお園生達が集まり、やきそばやフライドポテトを頬張りながら、ゲームに熱中したり、太鼓の腕前を披露したりと、狭い体育館のあちこちで歓声が上がっています。職員や子ども達が苦心して作った山車や御輿も登場し、お祭りは最高潮に盛り上がりました。(柏木)

ひかりのタイムス

独立第13号

「ひかりのタイムス」の欄は、編集長は袖ヶ浦ひかりの学園利用者の山岸裕君で、編集人の友田と相談しながら、原稿や作品を学園の利用者の人達から募集して編集しています。応募してくれた原稿については、加筆や訂正は一切しないで(行数の関係で本人の了解の上削除はする)原文のまま山岸君に得意のワープロで清書してもらい、割付け・編集の作業をしています。さらに学園の利用者の人達の作品などの写真を掲載しています。

特集・作業指導と

社会参加

私の仕事と職場実習

インタビュー

飯田 真奈子

山岸「のびろとひかりの両学園で、
どういう作業をしていますか」

飯田「ひかりのだと園内喫茶店で
ウェイトレスをやっています」

のびろだと、のびろ食堂の仕事こ
れは、食器洗い・椅子上げて・床
はき掃除・台ふきです。のびろ整
理室の仕事は、洗濯物たみだけで
す。」

山岸「作業で、大変な事はありませんか」

すか」

飯田「特に感じない。仕事は楽し
んでやっています。」

山岸「この10月から、旅館の仕
事実習していますが、この仕事で
の感想は」

飯田「お風呂の掃除は家でもやっ
ているから慣れている。段取りが難
しい。」

山岸「段取りの難しさってどうい
う意味ですか」

飯田「石鹸箱を片付けた後何をする
のか戸惑っている。」

山岸「菜の花苑(老人ホーム)の
実習から旅館の実習に変わられた
のはなぜですか」

飯田「1年半やって、次のステッ

プで違う仕事をいろいろしてみたい。自立したいから。実習は火曜
日9時15分〜12時15分まで、
の3時間。今は慣れるまで先生が
ついて慣れたら一人で作業しま
す。」

山岸「自立の為の仕事なら、菜の
花苑も同じはずですけど・・・」
飯田「自分に合う仕事をみつけた
い。菜の花苑はそのひとことと自
分なりに考えてる。いろいろ一つ
の仕事にこだわらず先生方から紹
介して貰った仕事にトライしてや
ってみて自分に合う仕事を見付け
ていくつもりです。」

山岸「人間関係のトラブルとか、



ひかりの牧場作業風景

老人ホームの都合で取り止めとか
そういう事情ではないのですか？」

飯田「それはありません。前回は
週2回の実習でした。しかし今回は
菜の花苑もそうですけれど、先
方が人手不足で、人手が欲しい都
合と、先生から4日連続でも仕事
が出来ると力がついたからという
事でやるので、そういう事は関係
しない。こういう事情です。」

山岸「菜の花苑の実習を振り返っ
てみて思うことは」

飯田「みなさんに喜ばれて、丁寧
に仕事した事が評価されて嬉しか
った。」

山岸「グループホームから通勤し
て生活する事は考えていますか」

飯田「考えていますけれど、親が
わりの先生はグループホームの先
生だけじゃないから、それにグル
ープホームに入居する利用者の組
み合わせで決まると先生方から言
われているから、慎重に自分がそ
こに入居する実力を蓄えてる段階
です。そういう事情で、今は、ひ
かりの学園内の居室で我慢してい
ます。」

山岸「どうもありがとうございます」

(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)
インタビュー 山岸 裕

櫛橋さんとの

インタビュ

櫛橋 潔

山岸「パン工房の仕事を選んだ理由は、？」

櫛橋「自分にあっている仕事だから」

山岸「どのパン作りを任されてますか？」

櫛橋「ミキサーからパンの生地を出して、発酵機に入れて、1時間かけて、寝かせて、生地を分割する仕事と、バット型に入れて、丸めたのを時間かけて膨らませる。それ(膨らませたパン)を再度発酵機に入れて成型する仕事を任されている。」

山岸「この仕事をやっていてつまらないと思う時はありますか？」

櫛橋「特にない。」

山岸「櫛橋さんから見た作業する利用者はどう映りますか？」

櫛橋「Mくんはチョロチョロするだけで、後のひとは普通にやっている。」

山岸「パン工房の休憩時間は？」

櫛橋「全体の休憩は、11時〜1時半と3時〜3時半の2回。後は個人個人の作業ベースで休憩が異なる。僕の場合はインタビュ

している時間の2時45分〜3時半と1時〜2時の2回」

山岸「パン工房の担当の先生の利用者に接する態度は？」

櫛橋「僕が決められている事をやっているのに、いろいろ言う。ストレスが溜まっていて利用者にぶつけるのはやめてほしい。全体的には、おとなしい。」

山岸「これからの仕事の目標は？」

櫛橋「特にない。そんな事を考える余裕が今のところない。」

(グループホーム利用者)
インタビュアー 山岸 裕

機織りのこと

秋山 良江

私は最近、織るのに大変難しい作品を作っています。でも、本当は嫌なのですが、給料の為に頑張っています。作業中は、いつもつい、歌を唄っちゃったり、手を止めちゃったりしています。だが、今の所、シヨールばかり織っているのです。

何故かという、売れる作品だからなのです。でも、去年、一時先方をイメージカラーにして織ったマフラーを続けて織っていた事がありました。でも、この作品

は多規子先生に頼まれて、織っていたのです。だけど、勝手に、自分の好きな物を織ったりして叱られる事もあります。三年前の時は、タータンチェックのマフラーを頼まれて織っていた事もありました。(袖ヶ浦のびろ学園利用者)



斉藤成尋君の作品

※カラーで現せないのが残念です。販売のイメージカラーをよくとらえているのです。真中のテーブルにはパンが並べられちゃんと値札もあります。

(袖ヶ浦のびろ学園利用者)

私のはたおりの作品の事

山中 和栄

私は、五年前の事でした。始めて作った作品は、クッションでした。これが作品第一号なのです。次に、作り始めたのは、作品第二号は、足ふきマットです。何枚も作り続けました。

石井先生に機織りの給料を貰ってくれました。そして、今はNECカラーの怒りのキッチンシリーズ7点セットを作りました。

それにもう一つ、レインボーカラーのシャギーセットを作りました。それから、現在は、コースターとか、ランチョンマットとか、卓上マットも作っています。

作品の結果、お金をもっとたくさん欲しいとか、おこずかいが値上がりしてまいります。

一ヵ月分の給料では、お家へ持って帰ったり、学園のおこずかいにしたり、又は、お家のおこずかいにしてもけっこうです。私も、これからも、ずいっと、機織りで頑張ってください。

どうぞよろしく願います。(袖ヶ浦ひかりの学園利用者)